

□ 統括的展望

寺西基之

新型コロナウイルスに振り回された音楽界

前年に引き続き、2021年の日本の音楽界も新型コロナウイルス（COVID-19）に振り回されることになった。2021年の日本のコロナの感染状況をざっと振り返ると、年明けは感染流行の第3波のまっただ中にあり、これはいったん縮小に向かったものの、4月に第4波が到来して5月に大きな山を作る。その後いったん下火になるが、7月に再び感染が拡大、この第5波は新たなデルタ株の出現もあって8月から9月にかけてかつてない感染者数と重症者数・死者数を記録し、病床逼迫などの医療崩壊をもたらした。この山が収まると、異様なほど感染状況が落ち着いてくる。3つの大きな流行の波があり、あとに行くほどそれが高くなったというのが大まかな流れだが、11月には海外でより感染力の強い新たなオミクロン株が出現したことにより、政府は11月30日から外国との往来を事実上停止、第6波の到来が近づきつつある中で1年が終わることとなった。

このように刻一刻と変わっていく状況に音楽界も対応を迫られた。前年の2020年夏から少しずつ演奏会が再開され、様々な感染対策を余儀なくされながらも、秋から音楽界に少しずつ活気が戻りつつあったのを受けて、2021年はそうした流れをいかに止めないでいくか、そのための努力と苦労が迫られた1年であったといえるだろう。多くの音楽家、演奏団体、主催者、マネジメント会社にとってはまさに死活問題であり、前年からの経済的打撃を引きずっての苦しい状況の中での活動が強いられた。前年に比べて入場制限は緩められ、一時おなじみのものとなった入場者半分以上による市松模様の座席配分などもだんだん見ることがなくなっていくものの、客足が以前のように戻らず、特に感染した場合のリスクが高い高齢者が来場を控えるといった状況が続く。

演奏会の開催自体、しばしば感染の波に翻弄され、例えば、第4波の折りに緊急事態宣言が出された東京都や大阪府では4月終わりからイベント休止の措置がとられてすべての演奏会は中止に追い込まれた。東京は5月の連休明けには再開できたものの、大阪は5月中も休止措置が続き、6月に入っても中旬までは演奏会の開催は平日に限られ、平常に戻るのがやっと6月下旬になったことは、オーケストラなど多くの団体に大きな打撃を与えることとなった。また4月終わりから5月初旬は東京では一切演奏会が消えてしまったのに対して、東京にすぐ隣接する川崎では神奈川県に緊急事態宣言が出されていなかったことで平常どおり演奏会が行なわれるといった現象もあるなど、感染の広がり具合と各自治体の判断によって様々に明暗が分かれた。

出演者や関係者にPCR陽性者が出たために、公演を中止せざるを得なくなった例も相次いだ。7月の東京二期会の《ファルスタッフ》はゲネプロ初日の後に合唱団のひとりが陽性となって2日目のゲネプロと本公演の初日が中止となった。また8月の4日と7日に東京文化会館主催で行なわれることになっていた大野和士指揮の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》も本番前に歌手に陽性者が出て、当初4日からの中止が発表されたが、その後さらに陽性者が確認されたため、結局両日ともに開催を断念せざるを得なくなった（同じプロダクションによる11月の新国立劇

場公演は無事実施されている）。また中止とまではいかないまでも、リハーサル前の感染発覚で出演者が交代した例もいくつかある。感染者にはまったく罪はないが、主催者はこうしたことが起こり得ることも常に念頭において舵取りをすることを余儀なくされた。

外国との往来がままならない状況が続いたことも音楽界には大きく響いた。外国人の来日には多くの厳しい条件をクリアしなくてはならず、関係省庁とのやりとり、さらに14日隔離などの措置に、関係者は多大な負担を強いられた。そもそも隔離期間を覚悟の上で来日しようという演奏家は多くはない。同様な問題は外国で活動する日本人演奏家が帰国する際にも当てはまる。多くの楽団や主催者、マネジメント会社は、まさかコロナがここまで長引くとは予測せず、2021年の収束を見越して外来アーティストの招聘を予定していたため、前年同様に企画の中止や変更にも追われることとなった。ようやく秋になって入国制限の条件がやや緩められ、少しずつ海外アーティスト来日の流れが生まれつつあった矢先に、前述のようにオミクロン株が出現、11月30日以降は一切外国からの入国が断たれてしまうことになる。

地方の大規模な音楽祭も感染状況に大きく影響を受けた。5月開催の別府アルゲリッチ音楽祭はコロナ第4波にぶつかってやむなく中止、出演予定のマルタ・アルゲリッチもミッシェル・マイスキーも入国許可が下りていて来日できるはずだったのだが、渡航直前に中止が決定するというタイミングだった。例年5月に開催されている宮崎国際音楽祭は2021年は8月に時期をずらして開催、第5波の最中とはなったが、ワディム・レーピンも来日でき、また最終日恒例の演奏会形式オペラも盛り上がりを見せたという。一方で札幌のパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）は7月下旬に開催されたものの、出演者とスタッフに感染が確認され、途中で中止されるという事態に陥った。やはり7月下旬に開催された霧島国際音楽祭、8月中旬から下旬にかけての草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル、9月上旬の武生国際音楽祭は無事開催された。一方で、8月下旬から9月初めにかけて予定されていたセイジ・オザワ松本フェスティバルは開催直前になって中止が決定、シャルル・デュトワ指揮のサイトウ・キネン・オーケストラによる無観客公演を無料で配信できたことがせめてもの救いだった。こうした地方の音楽祭は、それぞれの開催地の状況と、自治体の判断によって大きく左右される。ほとんどすべての地方音楽祭が中止となった前年とは違い、2021年は地方ごとの事情が明暗を大きく分けたといえよう。

このように2021年の音楽界は先が読めないという状況が続く、様々な問題に対する対処を迫られながらも、生き残るためにいかに活動を続けていくかが模索された1年だった。

アートキャラバン事業

もちろん音楽界のこうした厳しい現実を国は黙って見ていたわけではなく、様々な形で音楽家や演奏団体への支援を行なった。中でも特に大きかったのが『大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業』である。これは“文化芸術の質の向上と文化芸術の重要性や魅力を発信することにより、新型コロナウイルスの感染拡大による萎縮効果を乗り越え、文化芸術に対する需要喚起や業界全体の活性化を図る”ことを目的として、文化庁が“大規模で質の高い我が国の文化芸術水準を向上させるような公演を支援”するもので、クラシック関係では、日本を代表する4つのオペラ団体（東京二期会、藤原歌劇団、関西二期会、関西歌劇団）が組織したオペラキャラバン・ジャパン実行委員会による「2021グランドオペラフェスティバル in Japan」、日本オーケストラ連盟による「オーケストラ・キャラバン〜オーケストラと心に響くひとときを〜」、日

本クラシック音楽事業協会による「クラシック音楽が世界をつなぐ」が採択された。

このうち「2021グランドオペラフェスティバル in Japan」では、藤原歌劇団が《蝶々夫人》を浜松、下関、高知で、東京二期会が《魔笛》を山形、高崎、札幌で、関西二期会と関西歌劇団が《アドリアーナ・ルクヴール》を一宮、周南、岡谷で上演、それぞれのオペラ団体が平時ではできない地方公演の機会を持てた一方で、地方の人々にとっては通常はなかなか観る機会のない生のオペラを体験できたという点で、非常に意義の深いものとなった。また「オーケストラ・キャラバン」ではプロの21の楽団によって47の公演が行なわれたが、各楽団が自分たちの本拠地ではない全国各地の都市に赴いて演奏することで、オーケストラと地方の新たなつながりが生まれる契機を作り出した。一方「クラシック音楽が世界をつなぐ」は、「クラシック音楽界の再起と、より多くのお客様にクラシック音楽のすばらしさを体験していただく」ことを目的に、大ホール向けには特別編成のオーケストラや合唱によって管弦楽曲やオペラのアリアなどを曲目とした「華麗なるガラコンサート」、小ホール向けには第一線の名手たちのアンサンブルによる演奏会(《兵士の物語》《動物の謝肉祭》)を全国各地で展開した。特に前者の特別編成のオーケストラでは、コロナ禍で演奏機会を失ってしまったフリーランスを起用して演奏機会の場を与えたことは意義があったといえるだろう。

もちろん音楽界が被った損害の大きさを考えればこうした支援も一助に過ぎないだろうし、それでどれほどの恩恵を受けたかは参加団体によって違いがあったようだが、コロナ禍当初は文化事業に対する補助に腰が重かった国がこうした大型な支援を行なったことは高く評価してよいだろう。またそれを受けるために、これまでは個別に活動を行っていた音楽団体、あるいは対抗関係にあった音楽団体が協力し合い、結び付きを深める機会ともなったことは、今後の音楽界の発展にとって大きな意味があったといえるのではないだろうか。

厳しい状況の中での実り

かかる厳しい状況にあっても、2021年は(もちろんコロナ前にははるかに及ばないとしても)多数の演奏会が開催され、しかもきわめて優れた公演、興味深いプログラム、斬新な発想によるプロジェクトなどが相次ぎ、実りの多い1年となった。新国立劇場の渋谷慶一郎の《スーパーエンジェル》をはじめ、実験的な新しい試みも様々になされた。厳しい状況だからこそ逆にそれを乗り越えていこうという音楽家たち、関係者たちの強い思いがこの1年の活動に様々な形で現われたといえよう。外国からの入国が制限される中、オーケストラ公演やオペラ公演では日本人指揮者、日本人ソリストたちが役を務めて遜色のない演奏を聴かせ、室内楽やリサイタルでも充実した内容の演奏会や企画が多かった。長老やベテランたちが改めて存在感を発揮し、一方で若手の優れた演奏家たちの台頭も目立った。それらについては次ページ以降の各ジャンルの展望の項に譲るが、前年に引き続き、いや前年以上に日本人音楽家の底力というものを示し得た1年であったことは間違いない。

一方、数少ないながらも来日を果たした外国人音楽家ももたらしてくれたものも大きかった。指揮者ではヘルベルト・ブロムシュテット、セバステイアン・ヴァイグレ、ジョナサン・ノット、チョン・ミョンファン、アンドレア・パッティストーニ、アレクサンドル・ラザレフなど日本の楽団にポストを持つおなじみの顔触れに加えて、ずっと日本に滞在していたシンガポールの若手カーチン・ウォンが全国の楽団から引っ張りだことなり、ソリストではダニエル・

バレンボイム、エフゲニー・キーシン、クリスティアン・ツイメルマン、ビョートル・アンドルジェフスキ、ペーター・レーゼル、アレクサンドル・カントロフ、レオニダス・カヴァコス、イザベル・ファウストラが大きな印象を残した。外国人演奏家を聴く機会が大幅に減ったことによって、日本と異なる文化的背景というものが彼らの演奏からはいっそう強く感じられ、やはり音楽界にとって国際的な行き来がいかほど重要であるかを痛感させられたといえよう。大人数のオーケストラやアンサンブル団体は入国が難しく来日がほとんどなかったが、夏のサントリーホールサマーフェスティバルに出演して今日の最先端の音楽を聴かせてくれたアンサンブル・アンテルコンタンポラン(指揮はマティアス・ビンチャー)、前年に引き続いて秋に来日して伝統の重みを示してくれたウィーン・フィル(指揮はリッカルド・ムーティ)は大きな収穫だった。

ムーティといえば、東京・春・音楽祭で彼が指揮したヴェルディ《マクベス》(演奏会形式)は2021年の音楽界の白眉だったといえる。来日を果たした若い歌手たちと日本人歌手たち、そして日本の若手奏者たちによる臨時編成のオケを振っての公演ながら、一瞬の緩みもない完璧なまでの仕上がりの中でヴェルディの音楽の核心に斬りこんだ驚異的な名演だった。この《マクベス》公演は同音楽祭におけるムーティのイタリア・オペラ・アカデミーの一環だったが、日本の若手音楽家にイタリア・オペラの真髄を教え込むムーティの指導ぶりは徹底しており、コロナ禍においてこれほど内容の濃いプロジェクトが実現したことは高く評価されよう。

3月から4月にかけて開催されたこの東京・春・音楽祭をはじめ、6月のサントリーホールのチェンバーミュージック・ガーデンと調布国際音楽祭、7月から8月にかけてのミューザ川崎のフェスタサマーミュージックKAWASAKI、上にも触れた8月のサントリーホールサマーフェスティバルなどは、それぞれの特色を打ち出した企画でもって、音楽界の活性化に寄与した。

日本の若手演奏家が海外の国際コンクールでめざましい成績を残した1年でもあった。エリザベート王妃国際音楽コンクールのピアノ部門では3位に務川慧悟、4位に阪田知樹が入賞、ミュンヘン国際音楽コンクールでヴァイオリンの岡本誠司が優勝、リーズ国際ピアノ・コンクールで小林海都が2位、ヨーゼフ・ヨアヒム・ハノーファー国際ヴァイオリン・コンクールで吉田南が入賞(上位4人の順位を付けず)、ジュネーヴ国際音楽コンクールでチェロの上野通明が優勝、そしてショパン国際ピアノ・コンクールでは2位に反田恭平、4位に小林愛実が輝いた。コロナ禍において世界に通用する俊英が次々と出現したことは喜ばしい。

こうした国際コンクールは今ではネットで配信され、世界中の人々がリアルタイムで観ることができるようになった。特に日本ではショパン国際ピアノ・コンクールへの注目度が非常に高く、多くの人々がネット配信をとおしてコンクールの経緯を見守った。コンクールに限らず、演奏会やオペラ上演の配信など、コロナ以降ネットの活用がますます拍車がかかり、それによって、どこでも多数の人々が遠く離れた演奏会やコンクールを楽しめるようになってきている。反面それは、コンクールや演奏会をエンタメ化、ビジネス化していくことにもつながる。一方でコロナ禍は、一時期演奏会がまったく途絶えてしまったことで、生演奏の大切さ、すばらしさを再認識させる契機ともなった。音楽の発信の仕方、享受のあり方にコロナ禍は大きな影響を与えている。音楽を楽しむための新たな選択肢が生まれたことはよいことだが、あまりに特定の方向だけに偏り過ぎると、芸術の本質から離れていくことにもなりかねない。この2年で経験したことを今後どう生かしていくのがコロナ後の大きな課題となるだろう。